

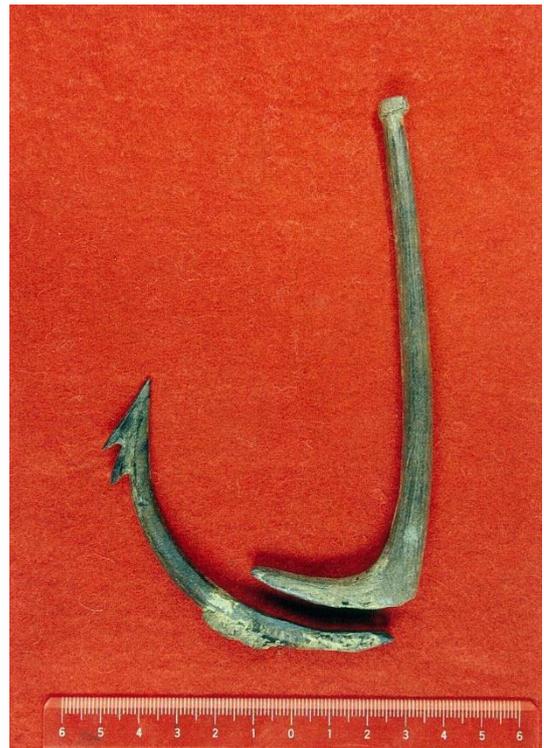
九州との交流示す釣り針 松江市・西川津遺跡 椿 真治

1984年夏、出雲市荒神谷遺跡から弥生銅剣358本が出土し、大々的に報道されました。その銅剣は国宝となり、現在は古代出雲歴史博物館に展示されています。その大発見の陰に隠れた遺跡が、実はこのコラムの第1回で紹介され、現在も再整理が続く西川津遺跡なのです。その中にこの遺跡を象徴し、個人的には国宝級と思っている一品があります。

荒神谷銅剣発見の年、私は4月より臨時職員として西川津遺跡海崎地区の調査に携わっていました。弥生時代の貝塚や川跡から、ふつうの遺跡では朽ちて残らないはずの貴重な遺物が続々と発見され、俄然注目を集めていたのです。そして、外部の専門家も参加する調査プロジェクトチームの立ち上げ話が出始めた、まさにその時でした。上司から「斐川町の農道予定地から銅剣が発見された」と聞かされ、その後あっという間に、注目もプロジェクトも荒神谷遺跡が奪っていったのです。

さて、西川津遺跡の貝塚からは、ヤマトシジミなどの貝殻に含まれる炭酸カルシウムの中和効果により、酸性土壌では残りにくい鳥獣魚骨などの食料ゴミや、それらを材料とするアクセサリーや道具類が極めて良好な保存状態で出土しました。

とくに鹿角や猪牙を材料として作られた釣り針が、製作途中のものも含めて20点余り出土し、中でもひとときわ注目されたのが「結合式釣り針」



西川津遺跡で出土した

「結合式釣り針」

と呼ばれる大型の一品です。この釣針は、軸部分が鹿角、針部分は猪牙を材料とし、いずれも丁寧に研磨され、両者を結合した部分には、乳白色の接着剤が残り、細糸で縛った痕跡も認められます。また、針先端外側に返しを二段つくり出し、反対側の根元部分には3mmの穴が開けられています。この穴に鳥の羽などを装着してルアーのように使用したとする説もあります。大きさは国内最大級で、長さ14cm、幅9cmもあり、サメやマグロなどの大型魚専用の釣針だろうと想像しています。

この結合式釣針は、縄文時代には西北九州の漁民だけが使っていた特殊なもので、弥生時代の西川津遺跡からの出土は異例なことでした。その後鳥取県の青谷上寺地遺跡でも出土し、北部九州から山陰へ稲作技術が伝えられる際に、西北九州の漁民達も関わった可能性が出てきたのです。(島根県埋蔵文化財調査センター主任)